

この音が鳴り出すと朝だ。遮光カーテンの闇の中で、わたしは黄色の旧式のワーゲンビートルが間欠泉のようにマフラーから破裂音をだし、車体を震わせてアイドリングしているところを想像した。マンシヨンのドア越しに響くエレベーターの開閉する音とそれに続いて何かが壁にこすれ、甲高い金属が触れ合う音がする。陽気な「彼ら」の笑い声が聞こえたのをきっかけにベッドから起き上がった。

パソコンデスクに向かい、椅子に座った。モニターをスリープから復帰させると、玄関前を捉えたカメラに黄色のワーゲンビートルが映っていた。車の屋根には大きな箱状の物を載せている。車の周りには小柄な男と長身で黒人の男二人がいた。前方のハッチを上げて、三人がリレーして荷物を積み込んでいる。車の持ち主である小柄な男の名前は知らない。勝手にガイと名付け観察している。

続けて他の画像をみたくなるのをぐっと我慢した。椅子から立ちかけたとき、黄色のワーゲンビートルが発進していった。モニターは車のいなくなったマンシヨン前を映している。そこに道路を挟んだ向かいのクリーニング屋から人が近づいてくる。その人はクリーニング屋の奥さんだった。手に青いバケツを持っているようだが、エプロンで隠すようにしていた。マンシヨンの前までくると、すばやくバケツの中身を花壇の植え込みに流し捨てた。

——またやった。

捨てられたのは洗剤混じりの汚水のはずだ。マンシヨン脇の植え込みに毎朝捨てに来るのを発見したのはいつ頃だっただろうか。気が付いてから毎日捨てに来ているのを確認している。汚水を捨てられた植え込みには、幹の周りが五〇センチくらいの蔦が植えられている。蔦は背面のコンクリートのフェンスに沿って上に伸び、八階建てのマンシヨン全体を覆っている。クリーニング屋の奥さんがどういいう意図で蔦に洗剤の汚水を撒きに来ているかは容易に推測できた。マンシヨン全体に纏わりついた蔦の葉が枯れて道路に落ちるのが許せないのだろう。蔦を枯らしてしまえばせいせいするというものだ。

椅子から立って窓際の遮光カーテンをさっと開いた。ガラスの向こうに蔦の葉が揺れている。窓を開けるとふんと堆肥の蒸れる匂いが風にのって部屋の中に入ってくる。わたしはくるりと振り向くと部屋の方に向き直った。

——おはよう。

部屋はオレンジのカーペットが敷かれ、部屋の真ん中に脚つきのバスタブが置いてある。バスタブに土を入れ、蔦を観葉植物のように室内で育てているのだ。バスタブに近づき蔦の葉を指でなぞる。蔦の先に新しい葉が開きかかっている。こんどは「おはよう」と声に出して言った。蔦の根元にも手を入れて土を軽く押さえた。ひとり暮らしの場合、声はほんどに必要かと思うくらい使わない。植物に話かけるのも声を忘れないためだ。

洗面とシャワーを済ませバスルームから出てくると、部屋の中にカレーのスパイスの匂

いが漂っていた。

バスタオルで頭髪を包んだまま、再びパソコンデスクの前に座る。モニターをチェックしていると、二階の部屋に宅配便の訪問があった。この女性がカレーの匂いの発生源だ。朝からカレーを仕込んで、大きな鍋やタッパーなどを持って出かけて行き、深夜に帰宅してくるのであった。

ドアの外から階段を駆け下りてくる音がして、一階のわたしの部屋の前を通り抜けて行った。モニターはそれから数秒遅れて、宅配業者が階段を降りる姿、部屋を通り過ぎる姿を映した。エントランスを通る時、ふっと口から何かを飛ばした。誰も見ていないと思ってガムを吐き捨てているのだ。マンション住人用の郵便受けまわりにはそんなゴミが散乱している。

半年前、住んでいたマンションを引っ越さねばならなくなって、方々に部屋探しにまわった。無職で四十七歳の独身女であること、連帯保証人になる肉親がいないことで何件も断られつづけた。そしてこのマンションだけが審査らしきものもなく、あっさり入居を許可してくれたのだった。収益マンションで所有者が全戸違うことが理由かどうか、ここでは修繕工事はずっとされていらないそうだ。古さもあるがノークレームが条件と言うことで、その代り、収入も国籍も問わない。当然ながら自然と訳ありの住人が集まってくる。

今日、一回目の振動を体を感じた。砂ぼこりが天井から舞い散るのが目にみえてわかる。椅子から立ち上がり、シュロでできたミニ箒でパソコンデスクの上の埃を集め取る。日になんどもマンション全体が冷蔵庫のコンバーターが始動と停止を繰り返すように、地の底から唸るような音を立ててガタガタと揺れる。

立ち上がったついでに冷蔵庫を開けて食べ物を探した。火を使って調理するものはいっさい買わないので、冷蔵庫の棚はコンビニのように個別包装された食べ物で埋め尽くされている。一番場所を占めているのはミネラルウォーターでその次がカロリーチャージ系スナックだ。五〇〇ミリリットルのミネラルウォーターと手に触れたカロリーバーを取り出して椅子に座った。

わたしの日課は夜間に自動録画している監視カメラからの映像を逐一再生してチェックすることだ。キーボードの上で両手の指をすばやく動かす準備運動をしてから、マウスで再生ボタンをクリックした。最初を選んだカメラはマンションの前を左右から映し出した二つだ。深夜に変化があるのは玄関先を映したカメラといま再生している二つのカメラがほとんどだからだ。

ブーメランの形にカーブしながら坂になっている内側にこのマンションは建っている。坂の上は駅へ続き、坂の下は学校や住宅が密集する一帯である。坂の上から下へサラリーマン風の男の姿が見えてきた。もう一つのカメラにはその前を歩く若い女が映っている。ちょうどマンションの正面あたりでサラリーマンが前を歩いている若い女に抱きついた。羽交い絞めにした片方の手で口を押えているのはつきりと映っている。次の瞬間、若い女は男の腕をかくぐって走って逃げていった。男は酔った足取りでマンションの中に入り込み、しばらくして出て行った。エントランスのライトに照らされた顔は毎朝この前を通る実直そうなサラリーマンであった。

震える手でカロリーバーの袋を破りひと口齧った。口の中にかすかなバナナの香りが広がる。わたしは必死にバナナの香りに集中しようと努めた。舌の動きが完全に止まり、何度

か咀嚼して形を崩したカロリーバーの欠片が口の中の唾液を吸い込んでしまった。それをミネラルウォーターで流し込もうとボトルを急角度に傾ける。あわてて飲みこんだ拍子に気管に入ってしまった。咳き込んでいると涙が流れてきた。咳が止まっても涙は止まらない。それから一時間ほどわたしは泣き続けた。パニック発作が起こったのだ。こうなると一定時間が経たないと収まらないのが常だった。

PTSDだと診断されたのは二〇代後半だ。まだ社会にハラスメントという考え方が広がってなかったころ、残業終わりの社内で起きたことだった。事が終わったあとに上司の男が放った言葉は「俺はお前が好きだ。お前も俺が好きだったんだろう？ ちよつと強引だったが、悪いようにはしないから」というものだった。服のボタンはちぎれ、ストッキングは破けて足首に引っかけた状態のわたしを見下ろしながら、上司は自分の服の乱れを整えていた。その日はどうやって帰ったのか記憶が飛んでしまっている。翌日は会社にも行っただし、上司に言われた通り、黙っておくのがいいのだろうか、いつもと変わらぬ職場の様子をみて思った。遠くの席から、上司は何も言わないわたしに安堵の表情を浮かべた。そんなわたしの態度とは逆の反応をわたしの身体は起こしたのだ。上司が近づいてくると分かった瞬間、体が硬直し卒倒したのだ。上司が手を差し伸べた瞬間、今度はパニック発作のような悲鳴をあげていた。結局、会社の医務室に運ばれ、上司がわたしにしたことがレイプであると会社の上層部に報告がなされた。あとのことは両親がぜんぶ代ってくれた。加害者から和解金を支払われ、会社もわたしを心配して休職期間を最長にしてくれたが職場の復帰は叶わなかった。以来、わたしは自分の背後に人が立つと全身が硬直して指一本動かさなくなる。人と同じ場所にいることができなくなってしまった。

ベッドに倒れ込むと、ふたたび眠りに落ちてしまった。それから夢をみた。ブリキ缶に詰められたドイツの焼菓子を手持っている。蓋は閉じられているがわたしは中身がペプアーケーヘンだと分かっているのだ。早く食べたいのだが缶を両手で持っているの蓋を開けることができない。誰かが、「あらかわいいロバだ」とわたしに話しかけてきた。何を言っているのだろうと缶を見下ろすと、缶にぴったり入るサイズの青いロバが横向けに寝たまま、わたしのほうを見つめていた。生き物を飼うことに多少のためらいはあったが、こんなにかわいいロバなら飼わないわけにはいかないだろうと思った。

目が覚めたとき部屋の中は薄暗くなっていた。壁面のモニターも同じように暗い世界を映しだしている。わたしは青いロバを探してベッドの上を手で探った。シーツのうえを滑る手が、ここが眠っている間にいた世界でないことを教えてくれた。

十一月に入って、日暮れがいつきに早くなった。起きている時間帯はまちまちだが一日十四時間は寝ている。惰眠を貪るとはこのことかも知れないが、わたしには寝ている時間も人生の一部なのだと思う。夢の中ではわたしは人を怖がってはいない。寝ているときは安らげるのだ。

モニターに黄色のフォルクスワーゲンビートルがフレームに入ってきた。車から降りてきたのは小柄な男のシルエットだった。エントランスのモニターにはベニヤで作ったと思われる工作物を抱えるガイの姿が映っている。曲線で切り取られたフォルムから猫だと分かった。赤いペンキで塗りつぶされ目や口を描いている。舞台美術のようでもあり、お店のディスプレイのようにも見える。わたしはガイを造形のアーティストだとみているが、

椅子やテーブルなどの家具も作っている。

ガイは八階と屋上を借り上げていて、作業場として屋上を使っている。このマンションは敷地面積の狭い建物でひとつのフロアに一戸の部屋だ。一階がわたしで二階がケータリングのカレー屋の二〇代の女性、三階はタクシードライバーが住んでいる。四階と五階は中国人ばかりの寮のようで四階が女性、五階が男性で分けていた。六階は空室、七階にいる男だけは何を仕事にしているのかまだ分からない。普通の共同住宅では音を出すと必ず隣人トラブルになるが、このマンションは夜八時を過ぎると活気づいてくる。ガイの作業場では電動工具の音が鳴り響くし、それが終わるとガイの仕事仲間の黒人たちが太鼓を叩きはじめる。はじめ、その音をきいたときは、誰かがCDを大音量でかけたのかと思った。さすがに一〇時には音は止むが、その次は仕事から戻ってきた中国人たちの部屋からの話し声が居酒屋の喧騒のように聞こえてくるのが常であった。

もうすぐタクシードライバーが出勤する時間だ。深夜の十二時半を指した時計をみて思った。彼は最近まで歳下の男とふたりで暮らしていた。タクシードライバーが五十歳くらいで同居している男は二十歳代後半くらいだ。若い方は無職のようだった。どこから酔って帰ってきたふたりが部屋の前で抱き合っている姿をモニター越しで観た。若い男は男娼だったのかもしれないと思うことがあった。それはタクシードライバーが不在のときに限って、別の男の訪問を受けていたからだ。若い男がいなくなったことに気づいたのは、タクシードライバーの男がスーパーで買い物して帰ってこなくなったからだだった。男は深夜勤務だったので、明けの日はレジ袋いっぱい買い物をした部屋の前を通っていく。袋からはみ出した白ネギや精肉のスチレンパックが鍋料理を連想させた。

そんなことを考えているとタクシー会社の制服を着たタクシードライバーの男がカメラに映った。手にゴミ袋をさげている。ゴミ収集の日は明日だが彼は仕事でゴミ出しできないのでいつもそうしているようだった。このマンションは独自の収集場所を敷地内に作れないので道路に面した場所に置くことになっているため、夜中に出すと猫に漁られ路上にゴミがばら撒かれてしまう。

玄関先を映したモニターを見てみると、クリーニング屋の奥さんが現れた。タクシードライバーと言いつい合っているようだった。夜中にゴミをだすなど注意したのだと思う。それを無視してマンションの前にゴミを置いて行ってしまった。タクシードライバーの姿が見えなくなった頃合いで、クリーニング屋の奥さんは置いていかれたゴミ袋を取るとマンションの中に立ち入ってきた。持ってきた貼紙を袋につけると郵便受けの下に置いて戻っていった。

わたしがこのマンションに越してきて一番の悩みはゴミ捨てだった。前に住んでいたマンションでは敷地にゴミ捨て場があり住人はいつでも捨ててよいことになっていた。しかも、マンションの一階がコンビニだったので深夜にゴミ捨てと買い物一度に済ますことができたのだ。あの一件がなければ今もそこに住んでいたと思う。

一件とは、ひとり暮らしなのに仕事にも行かず、部屋に籠りっきりのわたしをマンションの管理会社の人と住人数名が訪ねてきた。心配して様子を見に来たので少しでも顔を見せてと言う。インターフォン越しに、人と会うと具合が悪くなるので勘弁してほしいと断った。しかし、住人たちは会って話すというこんな簡単なことができないのはおかしいと

言った。住人たちの訪問の本当の意味は分かっていた。数週間前、わたしの部屋の隣に住む男が病死していた。自殺でないにせよ、そういう噂は広まるもので住人たちは表向きコミニケーションを取ることで、引きこもりの人の孤独を救うということなのだが、早い話、自分たちの住むマンションの評判を落としてもいたくないのだ。

いつも白い服を着て夜中にしか出てこないから『幽霊』と呼ばれていることも教えられた。その訪問は執拗に繰り返されたが、わたしは応じなかった。すると、最後にはとにかく気持ち悪いから出て行ってくれとまで言われたのだった。ずっと無視していると、わたしが捨てたゴミの中を漁っていることがわかった。親たちが話すことを子どもは聞いているのだろう。子どもたちに「幽霊女」と囃され、けたたましくチャイムを鳴らされた。ドアの新聞受けを壊された。

物音がしたのでモニターを見ると、玄関先のカメラに二階のケータリングの若い女が映っていた。彼女は駅まで自転車に荷物を積んで電車で仕事先に行っているようだ。カメラの死角になる自転車置き場から荷物を持ってでてくる場所だった。郵便受けで立ち止まり、そこで郵便物を調べていた。その下に置いてあるゴミ袋に気づいたのか、貼紙を読んでいる。すると、荷物と一緒にゴミ袋を持って自分の部屋に帰っていった。貼紙に何が書いてあったのか。今後はゴミ収集日の前夜のモニターチェックは入念にしなければと思った。

まだ夜が明けきらない午前四時を待って、わたしはドアを開けて廊下に出た。動悸が早くなり手にじっとり汗が滲む。蛍光灯の光でみる自分の手は青白かった。一年中、ネルの白い長袖のロングドレスを着て、髪は腰のあたりまで伸び放題だ。幽霊とあだ名されても仕方がない。体を一回転させ誰もいないことを確認する。市の指定ゴミ袋にいったいなったゴミをマンション前の道路に捨てに行く。燃えるゴミは週二回収集にくるが、わたしは月に二〜三回しかゴミを出さない。生ごみになるものを買わないのはそのためだ。

ゴミ袋に青いネットを被せてから、背中を伸ばして直立した。肺の中に晩秋の冷たさを含んだ空気を吸い込む。ここから徒歩三分のコンビニまで行く覚悟をしているのだ。今、向かいのクリーニング屋の窓から何か光った気がした。もしあの奥さんが起きて監視しているのだとしたら、この時間でも警告しに来そうな気がしてコンビニ行きをやめ、急いで部屋に戻った。胸に手を置くと鼓動が伝わるほどに強く打っている。落ち着くためにもパソコンデスクに向かいモニターをみてみた。クリーニング屋に灯りはついておらず、変化のない夜明け前の光景を眺めているうちに落ち着きが戻ってきた。

干渉と子どものいたずらに耐えられず引越しを決断したが、いまとなつては、つくづくこのマンションのこの部屋でよかつたと思う。また、もう一方で、それにしても、あの時の部屋探しは大変だったと振り返ってみて思う。

五月半ばになるうというのに足首まであるワンピースを着て、その上にトレンチコートで羽織ったわたしはツバ広の帽子に真っ黒いサングラス、顔をほとんど覆うようなマスク姿で不動産屋を何軒も巡っていた。人前に入る恐怖から不動産屋の店の前で何分も立ち尽くしていたとき、店の中から女性スタッフがでてきて声をかけてくれた。その彼女がこのマンションを案内してくれたのだった。

女性スタッフはちょうど二階のカレーケータリングの若い女の子と歳も雰囲気も似てい

た。彼女からすれば奇妙極まりない客のはずだが、おそらく他の客と変わらぬ接客をしてくれていたはずだ。この部屋のドアを開けた時も、いたずらをしたときのような剽軽な顔をしてわたしをみてくれた。わたしが棒立ちのままじっとしていると、ここはビルのオーナーが仕事部屋兼管理室として使っていたと教えてくれた。部屋の中にバスタブがひとつあるのは仕事で扱っていた商品で、次の借り手が使っても処分してもいいとのことだった。次にモニターが目に入った。わたしがじっとモニターを見つめているのに気づいた彼女は「配線を切ってますが、それはマンシヨンの監視カメラです」と言った。その言葉が言い終わらないうちに「ここにします」とわたしが言うと、彼女は最初から分かっていたとも言いたげに頷いたのだった。

こうして毎日、モニターを眺めていると首の後ろあたりから脳に向かってあわ粒が立ち上がっていくような感覚になる。監視カメラの配線は素人のわたしにでも簡単に繋げることができた。電源が入ったカメラからの画像がモニターに映し出されたときの小躍りしたような喜び。カメラの目がわたしの死角を補充し守ってくれる。これまで感じたことのないような恍惚とした感覚がいったい何なのか、いまでも自分にはわからない。ただ、この部屋にいと何と恐れなくていいという気持ちになる。

窓の外が白み始めた頃、グウーンという音とマンシヨン全体を揺らす振動が起こった。朝、この住人たちが起きて活動を始めると電気使用量が増える。因果関係はわからないがこの音の出どころは分かっていた。わたしはモニターを見る。半地下室のそこがマンシヨンの機械室になっている。モニターはまさに縦横高さがほぼ二メートルの立方体が激しく振動している画像を映し出している。

ワーゲンビートルのアイドリングの音が始まると、マンシヨンの廊下が騒がしくなってきた。カレースパイスの香りがドアの隙間から部屋に入ってくる。モニターには向かいのクリーニング屋の奥さんが店先の植木に水遣りをしているところが映し出されている。ケーターリングの若い女の子がごみ袋をふたつ持ってゴミ出しにきた。わたしはそれを見届けると、ベッドに横になり、眠りについた。

玄関のチャイムが押される音で目が覚めた。もちろん出るつもりはなかった。この部屋にテレビはなくNHKの受信料は払っていないので訪問があるとしたらNHKの集金人くらいしかいないのだ。ベッドから起き上がってモニターに近づく。部屋の前に立っているのは、集金人には見えなかった。ドアの向こう側にいるのは黒い鞆を持ったスーツ姿の若い男だ。男はここが留守だと諦めて、二階へあがって行く。モニターで追いかけてみると、マンシヨンの全部の部屋を訪問している。時間は午後一時を回っていた。

結局どこの部屋の住人もドアを開けることはなかった。若い男がマンシヨンを出て行くとき、エントランスの監視カメラのほうをじっと見ている姿がモニターに映し出された。物売りのセールスにはない強い意志がこもっているように思えた。マンシヨンの外に出ると、店先に出ていたクリーニング屋の奥さんのところへと向かっている。ふたりでマンシヨンを眺めながら長く話をしていた。クリーニング屋の奥さんは見たこともない愛想の良さで若い男の顔を見て笑っている。上に下に動くふたりの視線はマンシヨンの外観のことを話しているのだとわかった。

モニターから離れて、葛を植えているバスタブの傍に座った。そこから部屋の隅々を眺

めた。この部屋はコンテナボックスのような長方形で長辺が六メートル以上ある。マンション正面側とドアと反対の壁側に大きな窓が三つついている。そのひとつがベランダで掃出し窓で、あとの二つは明かり通りの窓だ。オレンジのカーペットにはバスタブから伸びた蔦が這い、内側の壁を登っている。わたしはこの光景をみていると、地球から人間だけが死に絶えたあとに現れるビジョンじゃないかと空想する。アスファルトの隙間を割って植物が生え、崩れたビルの中に花が咲いている。鳥も動物も虫も生きたいように生きている。人間がいなくなればきつとそうなる。

バスタブの中の土に手を指し入れてみる。土は柔らかく温かかった。黒い土のせいかわたしの細い腕は白磁の陶器みたいに見えた。静脈の青い線が幾本も絡み合いながら皮膚を透過してみえる。

——ぼくはね、君の指がとても好きなんだ。

克也の口癖だったその言葉がわたしを揺さぶる。次第に体が震え始め、動悸が激しくなる。なんとも言いようのない、嫌な気持ち「わたし」を乗っ取っていく。

一時間近くそれは続いた。わたしの顔は涙と鼻水とで濡れていた。バスタブの中に入れていた手を抜くと土に埋まっていた部分は染料で染めたように茶色に変色していた。

克也が好きだと言ってくれたわたしの手指はすっかりやせ細って、掌をうえにして握って開く動作をしている自分の行為、それが他人の手のように感じる。わたしたちはいつ出会ったのか。いつ、わたしはひとりになったのか。考えても白い霧がかかったような空白が見えるだけ。あるのは克也がいなくなったスペースだけだった。いや、それは違う。克也はこの湿った土の中にいる。

土に染まった手を再び、湿った土の中へゆつくり潜行させる。蔦の根を痛めないように。それでもぷちつと根がちぎれる感触がある。指先に異物が当たる。自分が本当に存在しているかどうかを確かめるためのルーティンである。

マンションの前に大勢の人だかりができている。その中心にいるのはクリーニング屋の奥さんだ。彼女は制服の警官に挟まれる形でビルの方を指差している。ほどなくして複数の足音が廊下の前を通り、エレベーターに乗ってあがっていった。モニターには七階で降りる制服警官と私服の男数人が映っていた。この階の住人は何をしているか不明の男が住んでいるはずだ。

玄関前のカメラにはクリーニング屋の奥さんや近所の人が集まってきていた。クリーニング屋の奥さんと並んでいるのは、このまえ訪ねてきたスーツの若い男だった。

その後もマンション全戸を訪ねてまわっていたスーツの男は立ち退き交渉を目的としていることがすぐわかった。ただ誰に雇われているのか不明だった。管理会社に問い合わせのメールを送ったが知らないというそっけないものだった。

スーツの男は足しげくタクシードライバーのもとに通っているのをモニターで確認していた。ほどなく、タクシードライバーは引越して行った。そのあと続けて、夜逃げのように中国人たちが部屋を引き払っていった。八階に住むガイのところも夜の太鼓演奏が始まると警察が通報により駆けつけるようになった。それと同じくして黒人はいなくなり、太鼓の音も消えた。ガイの仕事にも異変があった。毎朝、仕事のために停めていた黄色のワゴンが何度も駐禁のステッカーを貼られ、とうとうどこかへ荷物を両手に下げて歩いて

運んで行くようになったのだ。

わたしは何度チャイムを押されても応答しなかったし、二階のケータリングの女の子も訪問時間に部屋にいることはなかったが、クリーニング屋の主婦の色めきたった様子からすると、すべてはスーツの男が画策したことか、クリーニング屋の主婦と結託してのことだと思う。

三階のカメラをモニターに映してみる。タクシードライバーの住んでいた階だ。引越しが終わったあと、数日経ってから点検に人がやってきた。町の不動産屋の亭主といった普段着につっかけ姿の中年男だった。点検後、ドアの前には鉢植えの植物が数個置かれていた。

タクシードライバーの引越しは軽トラで片付いたのは知っていた。そこに乗りきらなかったのだろうか。多肉植物や観葉植物が主を失って廊下に打ち捨てられているのを見るのは心苦しかった。何度か部屋をでて植物を部屋に持ってこようかと考えたが、まだ決断がつかないでいる。

鉢の中でもひとときわ大きく枝を伸ばしている多肉植物に目をやった。あれは忘れもしない。小柄な老女が三階の部屋を訪ねたことがあったのだ。風呂敷に植木鉢を包んで持っていたのがそれだった。タクシードライバーは、めずらしく背広を着て老女を迎えていた。夜になると、ふたりで外出し、タクシードライバーひとり帰宅した。酔っぱらってふらふらとした足どりだった。

老女は彼の母親だろうと推測した。五十をとうに過ぎた息子の安否を確認しにどこか遠方の地からやってきたのだ。自分の家にあつた鉢を手土産にと。もう人生のあと何回、息子と会えるのかという思いで来たんだと思うとすこしセンチメンタルになったのを覚えている。

——ではなぜ、その鉢を置いていったのだろうか……。

どすどすと床を踏み鳴らす複数の靴の音が響く。モニターをエントランスにスイッチすると制服警官に連れられた七階の男が映った。通りを隔てた向こうにクリーニング屋の主婦の姿も見えた。

深夜、ドアポストにコトリと物が投げ入れられる音がした。廊下を歩いている後ろ姿はガイだった。ガイは二階に階段を使ってあがると、ケータリングの女の子のドアにも何かを差し入れて行った。

急いでドアポストの中を確認しに行く。白い紙が見えた。開けるとA四の紙が三つ折りにされて入っていた。開くとワープロで打たれた横書きの文章がほぼ上から下までぎっしりと詰まって印字されていた。先頭の文章は、〈いまこのマンションで起きていること〉というタイトルだ。まず今日の七階の住人に何があつたのかが書いてあつた。最近このマンション周辺で起きている女性を狙った暴漢が七階の住人だという匿名の通報があつた。事情を訊きに訪れた警察に七階の住人は挙動不審な行動を見せたため、家の中を見せて欲しいと言われたのだそうだ。七階の住人は違法のDVDを所持していたことを白状したため連行されて行った。文書には、三階の住人の引越し、四、五階の中国人たちの退去のことも書いてあつた。彼らは数カ月前にやってきたスーツの男の立ち退き話に応じる形でいったようだが、相手のことを調べあげて弱みにつけこんで追い出したようだ。それ

に自分にも仕事先などにいわれのない中傷のメールが送られていたり、車を少しでも停めていたら警察に通報されるようになったことが書かれていた。もし、不穏な動きがあったらすぐに自分に知らせて欲しいと締めくくっていたのだった。

スーツの男が投函していった封筒をこれまで見もしなかったが、いったいどんな言葉で立ち退きを言っていたのか知らなければならぬ。ゴミ袋に投げ込んでいた封筒を拾いだした。全部で三通あった。ひとつは会社のロゴ入りのA四サイズの封筒だ。簡単な自己紹介文と連絡を欲しいというメモがはいつていた。あとの二通も同じ男が投函しているのを知っていたが、封筒には会社のロゴはなかった。中をみて、背中に冷水を浴びせられたような悪寒が走った。

そこにはわたしのことを調べたと思われる内容が書かれていた。出身地や出身学校、勤めた会社名などが列記されていた。おそらくわたしの氏名から分かるのはその程度だったのだろう。続いてもう一通もみた。そこにはまったくいわれのない誹謗中傷が書かれていた。前のマンションでのトラブルもどうやら知っているような含みのある書き方だった。ただ、これをわたしに読ませて何をしたいのかわからなかった。

これは脅迫なのか。

わたしは「みんな」から逃げたかっただけなのだ。それなのに、どうして周りはわたしのことを放っておいてくれないのだ。意識が徐々に薄れていくなか、もうこんな世の中にいたくないと思った。

ふと、克也の冷たい手が頬をさすった気がした。隣室になったのが、いったい何年前のことだったのか。深夜の一階のコンビニでお互いの存在を認め合ってから、部屋が隣とは知らずにしばらく過ごしていた。ある時、同じタイミングでエレベーターに乗ってきたのは克也の方からだった。同じ階で降りて、同じ方向に歩く。先に部屋に着いたのがわたしで克也は隣の部屋の鍵を回していた。

わたしがパニック発作になると克也は小さな紙袋をわたしの口鼻に押し当てて、「ゆっくり。ゆっくり」と何度も背中をさすってくれた。まるで鏡に映ったわたしみたいな克也が涙を流しながらさすってくれていた。

気がつくともうの植わっているバスタブに覆いかぶさるように倒れていた。意識を失う前に思った気持ちはわたしの中に刻印されたままだ。

——克也……。

わたしはバスタブの土の中に深く手を沈めた。指先にこつと当たる固い質感が確認できた。それは青いクッキーの缶だ。克也の遺骨が入っている。

もうここからどこにも移りたくない。スーツの男がどんな嫌がらせをしてこようと、わたしはここに籠る。薦がコンクリートを浸食し、ミシミシと音をたてて内側を崩しているのだ。このマンションもろとも、わたしはこの世界から消えればいいだけなのだ。

クリーニング屋の奥さんが洗剤入りのバケツの水を薦にぶちまける。真面目そうな顔のサラリーマンが夜道に若い女を狙う暴漢になる。彼らはそういう裏のある自分たちのことは誰にも気づかれないと信じているわけなのだ。自分たちの側をまともな世界と決めつけている。ガイの手紙によれば、七階の男が痴漢だと通報があったというが、わたしは毎日マンションの前を通勤路にしているサラリーマンが襲っている証拠を持っている。証拠という言葉が自分の内側で反響した。

マンションの駐輪場から自転車を停める物音がした。深夜のため音をたてないように気を配っているのが伝わるようなゆっくりとした動きで生じる音だった。この場所は監視カメラの死角ではあるが、すぐ横が部屋なので大抵は気づくことができる。いつもなら、鍋が擦れあう音と短い歩幅で歩く彼女の足音が聞こえてくるはずだった。しかし、今日はいっこうにその音がしない。気になるのでエントランスと二階の彼女の部屋の前のカメラも確認していた。と、その時、駐輪場で自転車の倒れる音がした。鍋のような金属のたてる音もした。声は聞こえないが、靴がコンクリートを擦るような音もした。

わたしは震えた。

二十数年前に上司に後ろから抱きすくめられた、その時の男の力というものに今なお、おびえているのだ。また、大きな音がした。声はいっさい聞こえて来ない。

わたしはキッチンに行き、シンクの下収納扉をあけた。扉の内側に挿してあった牛刀包丁を持って玄関に向かった。いつかとも思い出せないが、ホームセンターで買ったものだ。ケースから出しただけの未使用のステンレス包丁はくもつて白っぽくなっていた。

ドアを開けると裸足のままで走っていった。わたしの視界に向かいのクリーニング屋の窓の明かりが入った。

駐輪場の入口に立つと、転んだ自転車の奥に黒い塊が見えた。一歩ずつ近づいていくと、ケータリングの女の子が男の下になって押さえこまれているのがはっきりとわかった。上の男は黒い上下の服を着ている。例のサラリーマンでないことは服装で分かった。

男の黒い服はパーカーだった。フードを頭に被っており、後ろに立っているわたしには気づいていない。わたしは包丁の刃を上なるべく、掌の中で包丁の柄を回転させた。男の脇腹に切っ先を立てた。そのまま、上体を包丁に預けるように傾けると。男は獣のような声をだして転がり落ちた。わたしはもう一歩前に進み出た。男はわたしを見た。次の瞬間には走り去っていた。

逃げて行った男の靴音がいつまでも耳の奥で鳴っている。それがわたしの耳の具合なのか、まだ近くを走り回っているのか判断がつかなかった。

『あの……』

耳の中でかすかな女の声があった。その声はわたしの全身の力を抜いてくれた。ほっとしたので鼻から大きく空気を吸い込んだ。そこには匂いがあった。毎朝ドアを潜って入ってくるカレースパイスの残り香だ。その匂いが分かったと同時にわたしの胃は信じられない勢いで蠕動と攪拌を始めた。

自分のお腹が別の生き物のようにぐねぐねと動く。不思議な気持ちでお腹に手を当てていた時、

「あ、ありがとうございます」

転がった自転車の奥から女の子の声があった。

声に驚いて手に持っていたものを落とす。金属の乾いた音が駐輪場に鳴り響く。気づけば、顎のあたりに女の子の頭があった。彼女はわたしの落とした包丁を拾っていた。

わたしを見上げるように頭を反らして、

「本当にありがとうございます」と言って包丁をわたしに差し出した。

わたしは受け取ることを躊躇っており、だらりと下に垂らした手を強く握りしめていた。

「怪我は、怪我はしなかった」

どういう訳か、頭で考えずに言葉がでてきた。

「はい。怪我は転んだ時に自転車です足を打ったくらいで……」

いっこうに受け取らない包丁を再度、蛍光灯に照らしながら、

「もし、人を刺したって思っておられるのであれば、これ、ほら、血はついてませんよ」

——人を刺しただと。

彼女はわたしに渡すのを諦め、後ろに下がると屈みこんだ。

「警察に言う？」

わたしは後ずさりながら、訊いた。

地面に散乱したタッパーや鍋を拾い集める手が止まる。鼻を吸っているが、泣いているのか。気になるので、彼女の傍まで行くと、コンクリートの上に置かれた牛刀包丁は彼女が言うとおり、血はついていなかった。

わたしが後に立っていることに気づくと、首を激しく横に振るのだった。

「警察に言わなくてもいいの？」

今度は何度も頷いた。

チャイムの音で目を覚ました。陽光を遮断するカーテンのせいで部屋は薄暗いが、相当長く眠った感覚はあったので今が朝なのか昼なのかわからなかった。ベッドから降りた足が真っ黒だ。

——ああ……。

ふらふらしながらパソコンデスクまで歩く。時間は十時だった。また、チャイムがなった。モニターで確かめると、ケータリングの女の子が立っていた。どうしようか迷って、部屋の中を行ったり来たりし、カーテンを開けに窓際に行ったりしてやりすごそうとしたが、結局出ることにした。

ドアを開けると、ピクニックに行くときのようなバスケットを持ったケータリングの女の子が立っていた。

「昨日はほんとにありがとうございます」

深いお辞儀をしてから、体を直立させた。やはり、彼女の身長はわたしの顎くらいしかないのだと改めて認識した。

「あっ」

彼女はわたしの足を見て声を漏らした。

そういえば、昨日どのようにこの部屋まで戻ってきたのか記憶がないなあと思いつながら、わたしは彼女の顔を見ていた。

「あの、わたし、料理を作ってきたんです。召し上がってもらおうと思って」

彼女の今日の服装はいつもの白いシャツと黒いパンツではなく、チェックのワークシャツとオーバーオールという、手に持つバスケットにぴったりの恰好だった。

ドアは廊下側に開いており、彼女の小さな体はもうわたしの部屋の領域に入っていた。

わたしが何も言わないでいると、段差のない沓脱に彼女の履いてきた赤いコンバースが揃えて置かれていた。それを見て振り返ると、バスタブの傍にしゃがみこんで珍しそうに鳶を眺めていた。

「昨夜は助けていただいて、ほんとにありがとうございました」

気が付くと、彼女はバスタブの横に正座をして、頭をオレンジのカーペットにつけていた。そこから頭をあげた彼女はパソコンデスクの方をみて、「あつ」と小さな声をだした。

「監視カメラのモニター」

わたしは平板な発音で言った。

「ここは管理人室だったのだから」

さも、元からついているような言い方をしてごまかした。

「そうなんです。だから昨夜も気づいてくれたんです」

彼女は手を打ってわたしをみた。

あんな怖い目にあっていたながら、どうしてこんなに普通に普通でいられるのか。わたしは監視カメラで気づいたのではないかと、言うべきかをどうしようかということと同時にそう思っていた。

「このお部屋って、『大いなる遺産』って映画で主人公の好きになる女の子の住んでいる家みたい。ディケンズの同名の小説が原作の」

彼女はわたしをみて三秒ほど待った。

「お金持ちの娘なんですけど、ちよつと気の変な伯母さんに育てられていて、住んでいる家は廃墟……、すみません。このお部屋って意味じゃなくて、あの、家の中が植物園みたいに草や花、鳥も飛んでいるんです」

そう言い終わると、ひとり頷いて笑っている。

「わたしその映画観た。その女の子は裸足で主人公の男の子の前に現れる」

わたしの網膜にあの萌えるようなグリーン色の廃墟が蘇ってきた。

「わたしの大好きな映画なんです。ローティーンのふたりの恋がキュンとくるのはもちろんですが、成長した主人公が絵の才能だけで貧しさや惨めさをひっくり返していく」

彼女は熱っぽく語尾を強調した。それに自分でも気づいたようで、

「ごめんなさい。わたししたら」と言い、バスケットに手をかけた。

蓋が開くとスパイスの香りが部屋に漂い始めた。昨夜、暗闇の中で匂いを嗅いだときのように、途端にわたしの胃が活動を始める。

「あの、厚かましいお願いしてもいいですか？」

彼女は棒立ちのまま胃をぐうぐういわせているわたしに向かって、

「今日、仕事が入ってなくて。それで昨日のお礼に料理を作ってきたんですけど、もしよかったら、ここで一緒に食べさせてもらってもいいですか？」

見下ろすと、バスケットの中には小さいタッパといっしょに皿やカップ、スプーンや箸が二セットずつ入っていた。これを見たら断りようがない。わたしは頷いた。

「よかった。じゃ、キッチンで盛り付けさせていいですか？」

そういいながら、キッチンに行ってしまった。

ひとり取り残されて、所在なく自分の着ている服をみたら、こちらもドロドロに汚れていた。白いネルのロングワンピースが灰色になるくらい汚れている。急に、着替えもしたくない、シャワーも浴びたいという気持ちになった。

「シャワー浴びてきます」

キッチンにいる彼女に向かって言った。キッチンから、「はあい」と可愛い声が帰って

くる。

足元の排水溝に黒い水が吸い込まれていく。頭の天辺から熱めのシャワーを浴びながら、今のわたしは浮かれているのではないかと思つた。

バスオールで頭髪を包み、引出しからデザイン違いの白いネルのワンピースを出して着た。ちらつと覗き見た部屋の様子は、すっかり準備が整つていて、床には彼女が持つてきた布が敷かれ、銀色の食器にたくさん料理が載つていた。あまり待たせては駄目だと思ひ、髪は濡れたままをゴムで結わえ、ニット帽ですつぱり隠した。

布の敷物の上に座ると、彼女は生野菜を盛り付けた皿を差し出した。

「ベジファーストです」

何のことか分からず受け取つた。喉が渴いていて何か飲み物が欲しかったので、皿を下に置いた。

「野菜、お嫌いですか？」

彼女は少し悲しそうに言つた。

「喉が……」

わたしはキョロキョロとあたりを見回した。

「すいません。ドリンク、忘れてました」

弾けるように立ち上がると、マグカップとグラスを持ってきた。

「こっちはアセロラのジュースで、こっちはチャイです。アセロラは甘酸っぱいですが、ビタミンたっぷりです」

透明の赤い液体は言われたとおり、酸っぱかった。あとは、彼女から渡される料理を食べ、食べている間に料理の説明を受けた。わたしが好きだったのは豆のたくさん入ったカレーとビリヤニと言つていた米料理だった。

「もう平気なの？」

暗さの欠片もない彼女の様子をみて訊いてみたくなつた。

「そんなことないです。最近、仕事でお世話になつていてる人のところに変な電話がはいつたり、ポストにわたしのことを調べたと思う内容の手紙が入つたりして……。あのなんとかつていう会社の男が訪ねてきてからです。上の中国人の人たちも……」

そこで話を止めてしまった。上の中国人たちに何があつたのかを知りたいと思つた。すると、

「わたしにはこれしかないんです」

料理を指して言つた。だから、ここを立ち退く訳にはいかないのだと。

彼女が部屋を出て行つたのは夕方の五時だった。わたしたちはリスのように少しづつ料理を食べては休憩し、お喋りしては料理を食べた。帰り際、彼女はわたしの包丁を差し出した。おせっかいですがと断つて、新聞紙で作つた鞘から包丁を抜くと、表面が少し擦れたようになつていた。包丁を研いでくれたそうだ。売られている状態の包丁は切れないわけではないが、刃を研いでいないので切れ味が鈍いらしい。これからはよく切れるようになったので、人には使わないでと笑つて帰つて行つた。

彼女がいなくなった部屋は静けさを取り戻し、温かさを残していた。片付けも全部していつてくれたので、わたしがすることは何も残つていなかった。被つていたニット帽を脱いでゴムで結つていた髪をおろした。まだ中のほうは乾いておらず湿つていた。指を櫛が

わりにして、髪をほぐすように動かしてみる。腰まで伸びた毛先はちぎった綿のように縮れて量もすくなくなっていた。

洗面所に行き、ドライヤーを片手に髪を乾かす。鏡に映る顔はいつもより血色が良い。彼女から色が白くて肌理が細かいですねと褒められた。克也と同じことを言うんだと思っ

て、それを聞いた。

誰かと過ごしたなんて、克也が死んで以来だった。もうわたしは誰とも関わることなく、死んでいくのだと思っていた。

わたしと克也はふたりでやっと一人の人間として機能できるような関係だった。わたしの状態がひどいときは克也がすべて世話をしてくれた。克也が具合を悪くして動けなくなると、わたしが彼のしていることを代りにすることができたのだ。

髪が乾くと柵からヘアクリームの瓶を取り、掌にたっぷり載せる。髪に馴染むとムスクの香りが体を包む。克也の使っていたクリームをいまも使い続けている。どうしようもなくなくてベッドから起き上がれないときでさえ、この匂いがあればなんとかなって来た。匂いは記憶であり、わたしにとって記憶も現実もそう変わらないからだ。克也の存在を感じる事ができるのであれば、生死など関係ないのだ。

克也の事を強く思おうとしているのに、思考はいつのまにか、さっきの彼女にスイッチされる。彼女こそ色が白く柔らかそうな肌をしていた。北海道出身だと言っていた。手の甲はふつくらして、節も筋も皺もない。手を水平にすると、甲に四つの窪みができた。歳は三十三歳というが、絶対に二十代にしか見えない。それから、

——彼女の名前を知らなかった。

彼女はわたしのことを「おねえさん」と呼んだ。わたしは何と呼んでいたのだろう。克也はわたしのことを呼ぶときは、毬江と言ひ、会話のときは君と言った。わたしは克也のことを何と呼んでいたのだろう。いまは克也と呼んでいけるけれど。

彼女に監視カメラに何か映っていたかと訊かれたとき、前にマンションの前で女の人が襲われた時のことを話した。監視カメラの録画をみかえして、このビルで起こっていることを把握しよう。その作業にさっそく取りかかっている。

録画をコピーし保存したのは深夜にサラリーマンが女の子を襲ったところからだ。クリニング屋の奥さんのバケツの水の所業も押さえてある。スーツの男が映っているものを重点にチェックをする。やはりこの頃から、ガイのいる屋上での酒盛りや中国人たちの騒がしい行動が減り始めている。

スーツの男は二日に一回はマンションの各部屋を訪ねていた。そしてその行動はどんどん大胆になり、マンションの外周やガイの不在のときに屋上にも上がっていた。映像が切り替わり、男はわたしの部屋の吹き出し窓の外に立っていた。カーテンを隔てたところがわたしのいつも寝ている場所だ。誰もいないとわかりながらも、ゆっくりと後ろを振り返った。

監視カメラは次々にスーツ男の行動を映しだしていた。それと、廊下を徘徊するスーツ男の服装にパターンがあるのを発見した。スーツに黒い鞆のときは、どこの部屋もインターフォンを押している。スウェットなどラフな服装のときはマンションの外周をうろついたり、部屋の前にきてもポストに投函してインターフォンは押していない。

ふと気になることがあって、昨日一日の録画を再生してみる。七階の男が警察に連行され、深夜、ケータリングの女の子が襲われた日だ。エントランス、各部屋の前などを見てみると、七階の部屋の前にラフな恰好の男が立っていた。スウェットの腹の中に入れていた何かをポストの中に投函すると、階段を降りて行った。そのあと、七階に警察が来ることになる。監視カメラを切り替えてエレベーターから降りてくるところをみる。七階の男は顔面蒼白だった。エントランスから道路にたむろする人たちを映し出す。フリーニング屋の奥さんのとなり立っているのはスーツ男だった。黒いパーカーを着て、フードを頭に被っている。今観たところも順番にコピーを取った。

夢中で録画を観ていると、ドンという音と振動が始まった。今日、ケータリングの女の子といっしょに食事をしているときにも、これがあって、彼女から「これ何なんですかね?」と問わず語りの言葉が出た。もし、「これ何だか知ってますか?」と訊かれていたら、わたしは地下の電気室の様子を彼女に話していた。あれから数時間のあいだに、わたしの気持ちは変わった。

モニターを見続けるのに疲れた。立ち上がって、部屋の真ん中のバスタブの傍に横になった。仰向けになって頭だけ振るとバスタブの底が見えた。バスタブ本体を四本の脚が床から浮かす構造のものだからだ。このバスタブに土を入れるのに苦労したことを思い出す。アスファルトに覆われた町に土が採れる場所はない。夜中に工事現場や建設中の土地を見つけては、袋に詰めてバスタブに入れていった。土がいっぱいになり、藁を数本移植した。そういうことをしているも、この住人たちは何も言っていない。前の所では夜中にコンビニに行くことを咎められたと言うのに。

朝までかかって作業をした。コピーを取った何個かのUSBメモリーも克也の物だった。クライアントである会社に派遣されて仕事をするのが基本の職種で克也は派遣先の担当者によって壊されてしまったのだ。問題があったのは克也の会社なのか。それとも社会には一定数の人間がサンドバッグのように打たれ、大多数の人間の身代わりをする仕組みになっているからだ。

廊下に足音がした。ガイたちが仕事に行くにはまだ早い時間である。モニターをつけて確認すると、そこには七階の男が映っていた。疲れたようだった。警察で嫌疑が晴れて還されたのだろうか。すると今度はマンシヨンの前が騒がしくなった。声はエントランスに近づき、一部はマンシヨンの中で叫んでいるようだった。

モニターを切り替えて、エントランスを映し出した。何人かの中年女性が初老の男性に向かって興奮して何かを喋っている。どうも七階の男の関係者のようだった。そこにガイが映り込んできた。一〇分ほどその場で押し問答をしていたが、ガイが仕事に行く時間になったのか、女性たちをマンシヨンから押し出す形でそのまま出て行った。

時計をみた。この時間になると二階からカレースパイスの香りが流れてきてもいいころなのだ。あの匂いは毎日していたと思ひ込んでいたが、昨日のように仕事のない日もあるのかもしれないと自分を落ち着かそうとした。

きっちり一時間、時計を何度も見上げては我慢をしていたが、もう限界だった。わたしは鍵を持ち、沓脱で靴を履いてドアを開けた。廊下に顔をつきだしたら煙草の臭いがした。ドアで遮断されていた外の世界の音が耳に飛び込んでくる。やはり、わたしには無理だったかと、部屋に戻ろうとしたとき、道路を隔てたフリーニング屋の前にたむろする人たち

の姿が目に入った。そこには煙草を吸っているあの男の姿もあった。体がかっと熱くなった。部屋に戻りかけた体を一回転させて廊下にでた。鍵をかけると、ノブを何度も回して確認した。階段を登るとき、再度クリーニング屋の方を見た。向こうからは見えてないのかわたしを見る人はいなかった。

二階のフロアに実際に来たのは初めてだった。監視カメラが捉えていたアングルを探してみる。彼女の部屋の前に立って、監視カメラの方を向く。不思議な感覚になった。わたしはここにいる。同時にわたしの部屋でこの映像を見ているのだ。

——ドッペルゲンガーか。

右手を握り軽くドアを叩いた。まったく音が鳴らなかった。拳を目の高さにあげて点検するように眺めた。それを裏返し、骨のところでコンコンと今度は音がした。反応はすぐにあった。

ドアはゆっくりと開いた。ドアチェーンがかかっている、まだ彼女の顔を見ることができない。ドアを覗き込むように顔をだした。

彼女は目を真つ赤にして泣いているようだった。

ドアは一度閉まり、チェーンが外される音がした。再びドアがゆっくり開いたが彼女は何も喋らなかった。

「どうしたの？」

わたしは彼女の顔を見ないようにして言った。泣きはらした顔を見てしまうと、今度は自分が立っていられないくらい泣き叫びそうになるからだ。

「カレーの匂いがないから心配した」

「何か怖い目にあつたの？」

「わたしが必要？」

矢継ぎ早に彼女を見ないで言った。それと手探りで彼女の手を探し、その手を取った。節のない柔らかくて小さな手だった。

彼女の口からは息しか出てこなかった。でも、彼女の手はわたしの手を強く握っている。「わたしの部屋にくる？」

このまま彼女の部屋に入ったら長くなると思った。

彼女は泣きながらも手早く準備をし、トートバッグを持って部屋の鍵をかけた。一階の部屋に着くまでの間、ふたりとも口はきかなかった。階段を降りたところで、クリーニング屋を見たがたむろしていた人はいなくなっていた。

昨日は部屋を明るくしてくれた彼女が今日は悲しそうに泣いている。彼女にブランケットを渡し、昨日と同じ場所に座るように言った。

こういう時は、まず何か飲み物をだすんだと、キッチンに行く。冷蔵庫の中はミネラルウォーターとカロリースナックしかないのはわかっている。が、さすがにこの時間にコンビニに行くことはできないと思った。

気がつくのと、彼女がキッチンの前に立っていた。もう泣いていなかった。

「使ってもいいですか？」

そう言うのとトートバッグの中身をシンクの台に置き始めた。

「昨日、使わせてもらったときに、フライパンがあるのをみたので」

ニンジンをすりおろし、砕いたナッツをそれぞれフライパンで煎ったり、それを一旦と

りだすと、今度はバターをフライパンで溶かし始めた。そこにニンジンを入れ結構な時間炒めていた。水分がなくなっただころで牛乳と何かのスパイス、また炒めてまとまってきたところに砂糖を入れていた。

「できました」

そう言いながら、小鍋に湯を沸かし、葉っぱを入れた。茶こしで漉してカップに注ぐ。彼女は笑っていた。

昨日と同じ場所に皿とカップを置いて座った。

「すみません。また心配かけちゃった」

彼女はカップを両手で包むようにして湯気を鼻にあてている。

「どうしたの？」

わたしは同じ問いかけをした。

「仕事が……」

言いかけると、また彼女の目から涙が流れた。

「いただきます」

無理やり聞きだすのは可哀想だと思い、彼女の作った料理に慌てて手を伸ばした。

ひと口スプーンで口の中に入れた。バターとスパイスの香りが広がり、口の中は甘いお菓子のような味で満たされた。美味しいと思った。もうひと口、さっきより多く掬って口の中へ入れる。また鼻孔に香りが広がる。滑らかな口どけで喉を通り、胃に入ってもなお最初の濃厚なバターとスパイスの香りは消えなかった。うーんと唸ってしまった。

「すごく美味しい」

わたしはこれでは表現が足りないと思い、「死ぬほど」と付け加えた。

「ほんとですか！」

彼女は赤い目を大きく見開いて言った。

「ほんと。だけど、どうしてこれを作ってくれた？」

わたしが訪ねた僅かな時間に、これだけの物をバッグに詰め込んで来たことに合点がいかなかった。

「実は、今日もおねえさんのところへ行こうと思ってて……、昨日から準備してたんです……」

カップで顔を隠すように泣き出した。

「どうしたの？」

そう言いながら、またひと口入れた。泣いている彼女には申し訳なかったが、わたしは鼻孔と舌が送ってくる甘やかな感覚によって体が弛緩していくのを抑えられなかった。

たっぷり皿に盛ってくれていた甘い料理は数分でなくなった。スプーンで皿を何度も擦った。子どもの頃にカップアイスの蓋の裏に付いたアイスをこそぎ取っていたことを不意に思い出した。

皿から顔をあげたときのわたしは笑っていたと思う。目の前にいる彼女と目が合って、彼女が笑い返したからだ。

「ハルワ」

「何？」

彼女はもう一度「ハルワ」と言った。

「インドのスイーツです。ちゃんと言うと『ガージャル・ハルワ』。ニンジンの練った菓子って意味です。カルダモンってスパイスが入ってるんですよ。食べてくださった方からは、また食べたくなって言われるので、自信ついちゃって、ふふふ……。」

わたし、仕事、できなくなっただけです。ケータリングで出張してるところに保健所の人に来て、飲食の提供は違法だと言われたそうなんです……。」

ガイの手紙にもあったが、スーツ男の仕業に違いないと思った。

「あなた自身、ケータリングの営業の許可は持ってなかったの？」

「そうだ、と頷いた。」

スーツ男のような悪い奴らには明確な目的がある。だから法律も奴らが使えば脅しの道具になるということか。

「八階の人から手紙、読んだ？」

彼女は頷く。

「同じ奴がやったと思う」

「わたしもそう思います。ちょっと前からこのマンションの中をうろろろしてます」

わたしは彼女にとって辛いことを話さねばと考えていた。

「昨日あれから監視カメラの録画をみても」

一語一語に力を込めて言った。

「そうなんです。何か映ってましたか？」

彼女は自分と無関係とばかりに軽い返事をした。

「映ってた。襲った男」

彼女の顔が強張った。

パソコンデスクのところまで連れてきて、椅子に座らせた。コピーしたUSBメモリーを差し込み、再生する。見せているのは昨日の朝からの分だった。

「なんとなく、そうじゃないかと思っていました。でも、七階の人のところにも何かしてましたね」

わたしはそうだと答えた。駐輪場の映像はないが、わたしが包丁で刺したあと、逃げ出した姿はしっかり映っていた。

「八階の人が何かあったらって、言っていましたよね。手紙に。これ、証拠になるんじゃないかな」

彼女は他のUSBメモリーにコピーした映像も見ると言った。わたしはバスタブの傍にいき、寝転んだ。その場から椅子に座る彼女をみた。この景色に既視感があると思った。

思い出そうとしたが、考えてみればこの部屋に人が入ったのは昨日と今日だけだ。きつと夢でみた情景なのだろう。

肩を揺すられて起こされた。知らぬ間に寝てしまっていた。部屋の中は真っ暗でパソコンの液晶の光が青く光っている。わたしは起き上がると、壁のスイッチを押した。ピインという音をたてて、蛍光灯が点いた。

「全部見ました。向かいのクリーニング屋のおばさんって、ひどいことしますね。ビルの蔭が枯れてるのはあの人の仕業だったんだ。それに痴漢男もちゃんと映ってましたね。わたし、夜遅くに何回もみたことあります。普通のサラリーマンでした。そんな人が女の人

を襲うなんて信じられませんでした」

彼女は興奮のせいか早口で言った。わたしは無言でそれに頷く。

「あっ」

モニターを見ていた彼女が小さく声をあげた。

「八階の人が仕事から帰ってきました。声かけましょうか？」

床に座ってまだぼおつとしているわたしに訊いた。

わたしが頷くと、彼女は部屋のドアを開けて廊下に身を乗り出した。足音が部屋の前で止まる。彼女が一方的に何か喋っていて、声が廊下に反響している。

「おねえさん、入ってもらってもかまいませんか？」

ドアのところからこちらに向かって言った。

「どうぞ」と言ったが声はあまりでていなかった。

お邪魔しますと言ってガイが入ってきた。わたしの内部でガイだ、ガイがきたと興奮するわたしがいる。日なたの匂いというのか、ガイが纏っていた匂いが部屋に漂う。材木を削ったときにするおが屑の匂い、塗料の匂い、機械油の匂いなど、わたしのおいの記憶を大いに刺激する。

ガイがパソコンデスクの椅子に座った。操作は彼女がしている。ガイがひとりごとのように、ブツブツ言うほかは、部屋の中はしんと静まり返っていた。

わたしはそこに加わることなく、さっきと同じようにバスタブの隣に横になった。彼女の操作するキーボードの音とガイの咳払いの音を聞きながら、次第に意識が薄れていく。

「おねえさん」彼女が肩を揺すって起こしにきた。

さっきと同じことが起こっているのかと一瞬不安に襲われた。夢の中で夢から覚めるという夢をみることがある。何度目覚めてもまだ夢の中なのだ。途中から、自分は夢をみていることを自覚しているのだが、夢の中で夢から覚めても、まだ夢の中だと分かると、すごく怖くなる。もう夢の中に閉じ込められて、出て来られないのではないか。または知らぬ間に自分は死んでいて、ここは死後の世界なのではないかと思うからだ。

恐る恐る目を開いた。彼女が傍にいて、パソコンデスクの前にはガイがいた。わたしは上体を起こして座り直した。

「全部観させてもらいました。彼女から聞いたんですけど、ここは元管理人室なんですってね。監視カメラが結構あるとは思ってたんですけど、ダミーかなにかだと思ってました。おかげで、いろんなことがわかってきました」

ガイはバリトンボイスだった。艶のある中低域の渋い声が耳に長く響く。その声にふさわしく、とてもゆっくりとした話し方をする。

「おねえさん、ふたりで話してたんだけど、この録画に映ってた七階のポストに投函した男って、スーツ男で間違いはないってことになったの。中国人の人や三階の人が出て行ったのも全部あの男のせいだった」

ガイは彼女の言葉を引き取って、

「僕のところで働いてくれてた外国人もリークがあって、働けなくなっちゃったし」

ここに越してきた頃に毎晩聞こえていた太鼓の音が恋しいと思った。

「あいつと話をしたことは？」

ガイはわたしに訊ねた。

わたしは首を横に振った。

「僕はあるんだけど、要点がさっぱりわからないんだ。ただ、ここに何年住んでますか？これしか訊かない。』だから何？』って、訊き返しても言わないんだよ。」

それから、向かいのクリーニング屋のおばさん、あの人はこのマンションの住人はならず者だと決めてかかって、いずれは自分たちに危害を加えると思いつ込んでる。僕、はつきり言われたことがある。住宅街の中にこんなスラムみたいな建物があることが害だつて」「それなら、わたしも言われました。あなたみたいな若い女がここに住めるってことは、あんたも顔に似合わず、あばずれかって」

ふたりは顔を見合わせて笑っている。

「自分こそがまっとうだと思ってるはず。知らないもの理解できないものは存在しちゃいけないと思ってる。誰かがすでに道を作って、その上しか歩かない。そんな奴どこにもいるし、そんな奴はいつでもクリーニング屋のおばさんや痴漢のサラリーマンになるってことだよ」とガイが言った。

わたしはガイの言葉を聞いて、ほんとにそう思っているのだと言う承認が得られたような気がした。居場所をみつけれられたと感じたのは間違つてなかったのだ。その証拠に彼女もガイもわたしのことを隣人として違和感なく接してくれている。この部屋の奇妙キテレツな様を変だとは言わない。

「ちよつとこれ、USBメモリーを借りていいかな。早いとこ七階の人に見せてあげよう。それから、どうして警察沙汰になったのか、聞いたら聞いてくる。もう一度、ここに戻ってきて構わないかな？」

わたしが頷くと彼女も頷いた。

ガイはエレベーターに乗って七階に上がって行った。わたしたちはモニターの前に行き、監視カメラで七階を見る。七階の住人のドアの前でガイが監視カメラに顔を向け、ウインクした。わたしたちはそれに笑った。

七階の住人はなかなか応答しなかった。ガイはチャイムだけではなく、声をかけているようにみえた。すると、ドアが少しだけ開いた。

彼女が大きく息を吐きだしながら、カーペットの上に座り込んだ。「どうしたの？」

座っていた椅子を回転させて彼女に向き合った。

「なんだか気が抜けちゃいました」

わたしが黙っていると、

「違うかな？ ずっと気を張っていたから、こうしてみなさんと同じことを考えたり共有できたりすることに安堵感があるっていうか。やっぱりほっとして気が抜けたでいいのかな」

彼女は自分で何を言ってるか分からないと言って笑った。

椅子から立ち上がって、わたしもバスタブの傍に座った。

「わたし、料理が好きでケータリングの仕事を始める前もよく家で作ってたんですよ」

彼女が話し始めた。

「カレーは極めたいというのもあって、しょっちゅう作ってました。単身者用のワンルームだったんですけど、管理会社から苦情が出てるって言われました。いまスメルハラスメントっぽいのあるんだって、その時知りました。たとえば、ホタル族って言われてたべ

ランダでの喫煙もそれに含まれるし、びっくりしたのは、洗濯物の柔軟剤も臭いって言われる。

それで引越しをするんですけど、どんなに気を配っても匂いはするしで。引越しを繰り返してうちに体調くずして、勤めていた会社をやめることになったんです」

彼女は言い終わるとキッチンに行き、カップに新しく入れたお茶をもって、戻ってきた。それからカーペットに三角座りをして、膝小僧にカップを載せて湯気を吹いている。

「体調くずすとね……」

彼女は懐かしそうに笑ってから、また話し出した。

「カレーがわたしを救ってくれたんです。スパイスってお薬でもあるんですよ。インドにも病気のとき食べる料理ってあって、カレーのように辛くはしないんですけど、米や豆、スパイスを煮てお粥をつくるんです。そのとき、分かったんです。料理を禁じられて病気になる、料理でまた元気になったってことは、料理をし続けることが生きることなんです。自分が食べたい料理を作るためには自分でするしかないっていうのもありました。お金を貯めてからではだめだったんです」

わたしは心配になった。

「これからどうするの？」

今朝、あんなに憔悴していたのは、料理を作ることを奪われたからではないか。

「はい。それが……、気が抜けちゃったって言うのが、いまの心境なんです。なんも考えてないです。でも、こうしてバランスを微調整することって必然なんだろうなって思ったら、すっと楽になって」

彼女はまた大きく笑った。

「ここでは心おきなく料理が作れますから」

彼女はこのマンションが蕨の浸食で倒壊することを知らない。その時も彼女はこのように前向きになれるのだろうか。それを試すように質問した。

「でも、あの男は全員を立ち退かそうとしてる。これからどんな汚い手を使ってくるか」

「ですよね……」

彼女が言い終わらないうちに、ドアがノックされた。ガイだった。

「七階と話してきた。仕事先の会社の弁護士がすぐ手を打ってくれたから帰れたらしい。今朝警察が来たのは、マンション周辺でたびたび起こってる暴行事件の犯人はこの男だっという、匿名電話があって事情を訊きに来たらしい。それで部屋を覗かれて、まあ怪しいって。彼は映像の仕事をしてるらしいんだけど、風俗系の。別にそれは違法行為じゃないやつ。ただ、部屋の中に風俗系のおもちゃがいっぱいあって、ビデオ編集の機器もたくさんあるし。今朝見つかったのが誰かが投げ入れていったらしいんだけど。彼のドアのポストに入ってたのは違法なDVDだったらしくて、それを開封して机に置いてたもんだから、任意同行になったって」

ガイはポストに入れた手紙と同じ内容のことを言った。

次の瞬間、地震かと思われる大きな揺れが始まった。三人は床に手をつけて揺れが収まるのを待った。揺れが収まるとガイが掃出し窓の方へ歩いていき、窓を開けて外の様子をみていた。振り返ると、

「ここも外壁がかなり剥がれてるな。屋上はもっとすごいことになってる」

バスタブに近づき、蔦を指でなぞった。それから根元の土の上に手を置いた。

「土があったかいな。僕も屋上に植物を育ててる。蔦も植えてるしね。外壁の蔦が枯れていったのは、クリーニング屋のばああの仕業だったとはな……」

わたしは彼女と目を合わせて頷いた。

「これからどうしますか？」

彼女はガイに訊いた。

わたしはその流れに割って入って、

「このマンションももう少し倒壊すると思う」

誰もいない所に向かって言った。

「えっ」

彼女が聞き返した。

「何か知ってるの？」

ガイはわたしの視線を捉え強い口調で訊いてきた。わたしは彼女の方をみてから、頷いた。

ふたりを自転車置き場の中を通過して、マンションの真裏にあたる半地下の機械室に案内した。

「なんだこれ……」

ガイが蔦と地下水に浸食された機械室をみて呟いた。携帯電話のトーチに照らされた室内は、コンクリートはすっかり剥げおちて錆びた鉄骨がむき出しになっている。

天井の方にトーチの光を当てながら、

「わかったぞ。これが通風孔で屋上まで繋がってるんだな」

ガイは納得したとばかりに頷いた。それからすぐに首を傾げながら、

「屋上に植木鉢を並べたような八つの煙突があった。ずっと何なのか謎だったけど、もしかしたらこのマンションの部屋に暖炉があったんじゃないかな」

「屋上に煙突があるんですか？ パリのアパルトマンみたいなの？」

彼女が可笑しそうに言った。

このマンションのオーナーが輸入家具の会社をしていたことが、暖炉付きマンションと結びつくように思えた。

「これは気になるな。これから全部の階を見て回ろうと思うけど、ふたりは？」ガイはわたしたちに訊いた。

エレベーターではなく、階段を使って三階まであがってきた。

人が住まなくなると空気が淀み、カビ臭さを感じた。タクシードライバーのドアの前にあった段ボールや植木は無くなっていた。

「この人、タクシー運転手だったんだけど、会社辞めて田舎に帰るって出て行った。でも、僕は田舎に帰ってないと思うんだよね」

ガイはそう言いながら、階段の手すりを握って、強度を確かめるように前後に揺すった。「どうしてですか？」彼女が訊く。

「田舎って変化することを拒むんだよね。個人の幸せより世間体や恥の文化が残ってる」彼女もガイの言葉に頷いていた。タクシードライバーがゲイだと知っていたのか。

「ここに植木鉢があつたはずだけど」

わたしはドアの前の何も無いところを指差した。

「それなら、屋上にあるよ。彼に貰つてほしいって頼まれたから」

そうだったのか……。声には出せず、黙つてガイの顔を見た。

四階と五階は中国人たちが使つていたフロアで、どちらのフロアも廊下には夥しい数のビニール傘が残されていた。五階でガイがドアノブを回すとドアはすつと開いた。部屋に人がいないことはわかつていたが、むつとする体臭が残っていた。ドアの内側に漢字の「福」という字を天地逆さまにした紙が貼つたままになっている。

六階に来るとガイが話した。

「この住人は孤独死してたんだけ」

歳は五〇歳くらいの男だったらしい。

「何度か屋上パーティーに誘つたことがあつてね。ものすごく穏やかな性格の人だった。お酒が好きで静かに飲む人だったよ」

なら孤独に死んでいないではないかと思つた。むしろ家族に囲まれながら亡くなる方が少ないはずだ。克也も死ぬときはひとりで逝つた。たとえ近くにいたって、その瞬間に立ち会えるとは限らない。

ふと見ると、六階のドアの端つこに、黒い油性マジックで〈終〉という文字が書かれてゐるのに気が付いた。ガイが書いたのだろうかなどと考えながら、指で字の上を擦つて見た。

「それだろうか？ 僕も気になつてるんだよ」

わたしは見られていたことに気づいて固まつた。

「清掃業者が付けた印とか？」

彼女が言つた。

〈終〉という字を丸で囲んだ印は、絶対的終わりを表しているように思えた。ここには永久に誰も住まない、そういう意味だ。

七階に来て、ガイはこの住人も誘つてみようと言つた。

わたしと彼女はすでにガイに誘われて屋上で食事をする事になっていた。チャイムを鳴らすと住人はすぐに顔を出した。わたしと彼女をみると、お辞儀をした。

八階のガイの住むフロアは劇場のバックヤードのようだった。大道具や小道具が鮮やかなペイントを施され、出番を待っている。彼女がガイの仕事のことを質問した。ガイは「何でも屋」と答えた。椅子でもテーブルでもドア一枚でも頼まれたら作る。内装もする。舞台美術もする。アート制作もし、展覧会もする。なるほどと思つた。

屋上は真つ暗だった。ガイはわたしたちをその場にとどめて、ランプを点けて回つた。

「このランプなんだか知ってる？」ガイがわたしたちに向かって訊いた。

「これはね、集魚灯っていうんだよ。この仕事してると、骨董市にもよく顔をだすからね。これはイカ釣り漁船に使つてたやつ」

屋上の中央にテント用の支柱が立っていてランプはその周囲に沿つて吊り下げられていた。ガラスを通して灯つた火は暖かな同心円を作つて周りを照らした。目が慣れてくると、木製の民芸楽器や太鼓があるのに気がついた。これがかつて聴いていた太鼓なのだろうと思つた。

屋上の入口で声がした。振り返ると赤いキャンプを被ったピザの配達人が立っていた。ガイがお金を払ってピザを受け取った。仕事で使う工作台を手際よくセッティングし、ピザを置いた。紙バックの赤ワインと缶ビールが運ばれ、ガイがどうぞとみんなに言うのとつ缶ビールを取り、蓋を開けて一気にあおった。

わたしたちはクリーニング屋の奥さんの話で盛り上がった。わたしたちの蔦の根元に汚水を捨てにくる姿は悪鬼そのものだ。七階の住人が言って、みんなが笑った。ガイがあのおばさん、隣の植木鉢を蹴ってこかしていたぞと言って、またみんなが笑った。でこのマンションが倒壊するかもしれないことを七階の住人にも教えた。七階の住人はそれにも笑った。

わたしは赤ワインをコップに半分飲んだ。

「太鼓を叩きたい」

立ち上がって太鼓のところへ行った。ガイがついてきて、丸椅子に座ると足の間に太鼓を挟んだ。低音、中音、高音の出し方の見本を見せてくれた。リズムは各音ごと左右でグン、ドン、と言いながら叩いた。わたしも真似て足の間に太鼓を挟み、右、左と手の位置を変えながら叩いた。

「上手いじゃん」

ガイはわたしのでたらめなリズムを誉めた。

「通報されますね。きつと」

七階の住人はそう言いつつ、僕もやりますとやってきた。

「あれ、ここから向かいのクリーニング屋の二階の部分が見えますね」

彼女が立ちあがって言った。

同じ方向を見た七階の住人が、

「あのビルの壁にプロジェクターで映像映せそうだ」と言った。

「あれ流しちゃう？」

ガイが言った。

七階の住人が部屋からプロジェクターとノートパソコンを持ってくるとフェンス際に台を作って、そこからクリーニング屋の隣のビルの壁に投射するように調整した。わたしのコピーしたUSBメモリーがノートパソコンに差し込まれ、映像が流れ始めた。

ビルの壁に、マンションの花壇にバケツの水をぶちまけるクリーニング屋の奥さんの姿が映った。

「ヒュー」七階の住人は拳を突き上げた。

わたしは太鼓を叩き続けた。赤ワインのせいなのか体内の血がものすごい勢いでながれているようだ。

「グン、タ、ドン、ゴ、ドン、パ、グン、タ……」

ガイがわたしの旋律に合わせてくれる。首のうしろの方からあわ粒が頭に向かってあがってくる。掌を打面に載せるように叩く。反対の手で縁を掴むように打つ。音にならない振動が腹に伝わってくる。

目を覚ますと、自分の部屋のベッドに寝ていた。面白い夢をみたなあと、わたしは体を

伸ばした。こんなに楽しい夢をみたのは何十年ぶりか。床に足をつけると、少しふらついた。トイレに入り、便座に腰をおろした。

自分の太腿を使って、太鼓を叩く真似をする。グン、タ、ドン、ゴ、ドン、パ、グン、タ。愉快だった。

トイレから戻ってくると、玄関のドアが勢いよく開いた。

「おねえさん、大丈夫でしたか？ 昨夜は太鼓を抱えたまま寝ちゃってて、大変だったんですよ。前に言ってたインドのお粥作ってきましたよ」

——あ、そうか。

「加奈！ ありがとう」とわたしは彼女の名前を呼んでいた。